



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道のワイン産地形成におけるテロワールの形成のメカニズム : 地域資源の「翻訳」と「構造」の適合モデル
Author(s)	松山, 元樹
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第16767号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16767
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99612
Type	doctoral thesis
File Information	MATSUYAMA_Motoki_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学 位 論 文 内 容 の 要 旨

博士の専攻分野の名称： 博 士（農学）

氏名 松山 元樹

学 位 論 文 題 名

北海道のワイン産地形成におけるテロワールの形成のメカニズム
—地域資源の「翻訳」と「構造」の適合モデル—

1. 研究の背景と目的

近年、気候変動による適地拡大を背景に、北海道のワイン産業は急速な成長を遂げている。2000年代以降の特徴は、かつての十勝・池田町に見られた自治体主導の「設計された産地形成」とは異なり、多様な民間主体が参入する「自律的な産地形成」へとモードが変容している点にある。この新たな局面において、産地全体を統率する強力なリーダーは不在であり、いわば「制度的空白」の中で、多数のアクターがボトムアップで関係性を構築している。しかし、外部から「北海道」という広域ブランドとして認知される一方で、内部では後志や空知といったサブ地域ごとに、語られる物語や戦略に顕著な差異が生じている。本研究の目的は、この制度的空白において、地域のアクターがどのようにして「地域らしさ（テロワール）」を再編しているのか、その動態的なメカニズムを解明することである。本研究では、テロワールを単なる自然的所与ではなく、人間と自然の相互作用を通じて事後的に意味づけられる「社会的構築物」として捉える。その上で、テロワール形成の成否を分ける要因として、地域における「資源の存在形態」と「ネットワークの構造特性」の「適合」という独自の分析視角を導入し、以下の二つの命題を検証・理論化することを課題とする。【命題1】地域資源の特性（歴史的・層位的／空間的・多分野的）により、テロワールの翻訳パターンが異なる。【命題2】その翻訳を実行するために、地域ネットワークは機能的に最適な構造（結束型／橋渡し型）へと組織化される。

2. テロワールの「翻訳様式」と「ネットワーク構造」の定量的検証

（1）ナラティブ分析による翻訳パターンの類型化（第2章）

北海道内の主要産地である「後志（余市・仁木等）」と「空知（三笠・岩見沢等）」のワイナリー・ナラティブを対象に、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いた分析を行った。分析の結果、後志エリアでは「美的・体験的価値への転換」という翻訳様式が抽出された。ここでは、多様な出自を持つ個人が、地域に空間的・多分野的に分散する遊休ストック（古民家や風景）を審美的な資源として再発見し、ガストロノミーや滞在といった都市的消費文脈へと接続している（空間的・水平的な翻訳）。対して、空知エリアでは「倫理的・生産的価値への深化」という翻訳様式が抽出された。ここでは、豪雪や特異な地質といった歴史的・層位的に埋蔵された厳しい自然環境に対し、農的倫理と共同体の連帯によって対峙し、持続可能な生産の文脈を構築している（歴史的・文脈的な翻訳）。これにより、地域資源の特性に応じた異なる翻訳モデルの存在が実証された。

（2）イベント共参加ネットワークによる構造分析（第3章・第4章）

次に、これらのナラティブが生成・共有される基盤としての「ネットワーク構造」を検証するため、地域イベントへの共参加データを用いた社会ネットワーク分析（SNA）を行った。分析の結果、空知エリアはネットワーク密度が極めて高い「結束型」構造を、後志エリアは特定のキープレイヤーが高い媒介中心性を持つ「橋渡し型」構造を示した。これらは、単に資源形態が構造を形成したのではなく、各地域の資源特性に適合的な構造がテロワール形成の基盤として存在し、活用されてきたことを示唆している。すなわち、空知の結束型は歴史的で文脈依存度の高いナラ

タイプの共有・維持に、後志の橋渡し型は空間的に分散する異質な資源の結合・編集に、それぞれ機能的に適した構造として機能していたことが裏付けられた。

3. 資源と構造の適合メカニズム：事例研究

(1) 空間的資源と橋渡し型構造（第5章）

後志地域の事例として、余市町の「ワイン産業（新規参入者）」と「水産業（既存産業）」の連携を取り上げた。同地域には「海」と「丘」という空間的に隣接しながらも、多分野に分断された資源が存在していた。この状況に対し、橋渡し型のネットワーク構造を活用することで、ワイナリーと「触媒」として機能したアクターが、撤退の方針にあった牡蠣養殖に対し「ワインに合う」という新たな意味を付与（翻訳）した。具体的には、シングルシード方式への技術革新を促すとともに、専用ワインの開発とガストロノミーイベントを通じて、両者をペアリングとして社会化した。これは、バラバラに存在していた資源を、橋渡し型の機能を用いて「編集」し、テロワールという新たな価値を創出した事例である。

(2) 歴史的資源と結束型構造（第6章）

空知地域の事例として、三笠市のワイナリーと「三笠ジオパーク」の連携を取り上げた。同地域には、一億年前の地層や炭鉱遺産という「歴史的・層位的資源」が地中や過去に埋没していた。生産者は、「地層ごとの植え分け」という栽培実践を通じて物理的な証拠を提示し、行政（ジオパーク）が掲げる「一億年の時間旅行」というマクロな物語への接続を図った。ここでは、行政と民間が相互のリソースを持ち寄る「ハイブリッド・ガバナンス」が機能しており、結束型のネットワーク構造が、個人の実践を地域全体の重層的な歴史文脈（系譜）へと位置づけ、共有するための基盤として活用されている。

4. 総合考察：関係論的テロワールの提示

(1) 戦略的適合モデルの構築（第7章）

事例の比較分析から、北海道のワイン産地形成においては、資源の存在形態に対し、機能的に適合する構造が選択された二つの成功モデルが存在することが明らかになった。第一は、後志に見られる「編集的テロワール」である。ここでは「空間的な広がり（多分野連携）」を統合するために「橋渡し型」構造が選択・活用され、異質なものの結合によって真正性が獲得される。第二は、空知に見られる「系譜的テロワール」である。ここでは「時間的な深み（歴史・地質）」を回復するために「結束型」構造が選択・活用され、文脈の共有と深化によって真正性が獲得される。これらは、制度的空白という環境下において、アクターたちが自地域の資源特性を見極め、生存戦略として最適なガバナンスを創発させた結果である。

(2) 4象限マトリクスによる理論化と含意（第8章）

本研究の結論として、「資源（歴史的／空間的）」と「構造（結束／橋渡し）」を軸とした4象限のマトリクスを提示する。このモデルは、成功事例（適合領域）だけでなく、失敗のリスク（不適合領域）をも説明する。例えば、歴史的資源があるにもかかわらず結束が弱い場合は「アイデンティティの散逸（観光的消費）」を招き、空間的・多分野的資源があるにもかかわらず閉鎖的な結束に固執する場合は「産業の蛸壺化」を招く。テロワールとは、固定的な名詞ではなく、アクターが資源と構造を適合させ続ける「動詞的なプロセス」である。本研究が提示する「関係論的テロワール」の視座は、画一的な振興策を排し、地域ごとの「場の認識」に基づいた戦略的ネットワーク構築の重要性を示唆している。

5. 結語

本論文は、北海道という「制度的空白」のフィールドにおいて、アクターたちがいかにして「翻訳」と「構造化」の実践を通じ、固有の価値を創出しているかを解明したものである。提示した「意味づけ（空間的・橋渡し）」と「文脈化（歴史的・結束）」のモデルは、未完の産地における多様なテロワールの生成プロセスを読み解く理論的枠組みであり、今後の地域ブランディングに対する実践的な羅針盤となるものである。